

<小学生>

戦争は怖い

第一小学校

5年

戸塚暖七

私は毎年夏休みになると、おじいちゃんおばあちゃんの家に行きます。夜、ねる前におじいちゃんおばあちゃんといっしょにドラマを見ました。その内容は「戦争」でした。

このとき私は、あまり戦争を知らなかったので最初は、
(戦争ってどんなのだろう。)

と、考えていましたが、ドラマを見終わった後の私の気持ちは一転しました。

そのドラマでは、敵をたおすために戦う人々、戦争で家族を失い取り残されていく人々、また、戦争がいやになり自殺していく人々までいました。

そして、私は戦争の怖さについて考え、ある一つの結論にたどりつきました。戦争を体験していても、していなくてもみんな「戦争は怖い」というけれど果たして本当にそうなののでしょうか？私のような戦争を体験していない人々は戦争の怖さについてどう思っているのでしょうか？家族を失ったくらいか？それとも火事で家を失ったくらいか？でも、両方合わさっているから怖いかも！などのように私は考えました。ドラマを見ている時に怖いと感じましたが、それはふつうの怖さではありませんでした。初めて感じる怖さ。言葉で表せないくらいの怖さ。戦争には体験した人にしか分からない怖さがあると私は思います。

私は戦争の怖さを確かめるために戦争を体験したおじいちゃんに聞いてみることにしました。おじいちゃんは、戦争についていろいろ話してくれました。なかでも印象に残っているのは「家族について」です。私のおじいちゃんは五人兄弟で戦争の途中、食料がなくなってきた時におじいさんの家に妹と預けられたそうです。また、戦争が始まるとどこの家のお父さんも兵隊として国のために働かないといけません。おじいちゃんが小さな時に、おじいちゃんのお父さんも戦争で亡くなったそうです。

これからも私のような戦争を知らない世代が増えていきます。なので、私たちは戦争についてよく知り、本当の怖さは分からなくても自分なりの言葉で「戦争は怖い」と、次の世代に伝えていきたいです。

平和への祈り

第二小学校

6年

里村

萌

戦争は絶対にしてはいけない。

夏休み沼津大空襲について調べた。

なぜ沼津がせめられてしまったか。

理由は、沼津がただ都市であったから、
とてもかんたんな理由で

こんなにみんな苦しんでしまったのは、
とても悲しいことだ。

焼夷弾が束になり、
上から落ちてきた。

大手町交差点辺りを中心とした
半径1200メートルが焼けた。
37万2764もの焼夷弾で。

辺り一面が、
火の海になった。

約一時間40分続いた空襲、
ようやく朝の六時に鎮火した。

おそろしい一夜
一夜にして

1万1802戸が全半焼し、
779人もの死傷者が出た。

今は平和な
私の住む沼津

戦争は

全ての人が傷つく
悲しみが消えずに

未来に残る

決してやってはいけない。

今、戦争がどこかで始まろうとしている。

ゆれ動く世界。
今こそ
世界の人に思い出してほしい。
過去の戦争のこわさを。
そして、平和の価値を。

平和を願って

第二小学校

6年

長谷川 芽 吹

私は昨年、家族旅行で広島へ行きました。そして、広島平和記念資料館へ行きました。資料館では、熱線で焼けこげた人の写真や、8時15分で止まった時計など、原子爆弾の悲惨さを見てきました。原爆ドームは核兵器のおそろしさを物語っていました。私は正直、資料館にある物を直視することができませんでした。昨年、オバマ大統領が広島平和記念館を訪問し、折りづるを平和のメッセージと共に置いていったことは、核兵器廃絶に一歩近づいたと思いました。

8月は、6日に広島、9日に長崎の原爆の日、15日は終戦の日と、テレビやニュースで核爆弾や戦争のことをたくさん報道します。大切なのは、その事を忘れずに若い人々に伝えていくことだと思いました。

私は祖父母から、戦争の話を聞きました。祖父は、がんばって生きていようと、満州から日本に帰るだけでも大変で、とても苦勞したそうです。帰って来たら、沼津駅周辺はアメリカ軍機の爆撃で焼け野原だったと聞きました。でも、お金も食べ物も何もないけれども、戦争のない平和な生活が始まったようです。祖父の話を聞いて、私は生きていることの幸せ、食べ物があることの幸せ、殺し合いのないことの幸せを忘れてはいけないな、と思いました。祖母からは、配給の食べ物だけでは足りなくて、いつも腹ぺこだったと聞きました。また、六人姉妹で貧しかったから、学校で使う物や食べ物などを分け合って、協力して過ごしていたそうです。祖父が七歳、祖母が五歳の時に戦争が終わりました。私とは全く違った小学校時代で、私には想像ができません。自分の今の生活は、とても恵まれているのだと強く感じました。また、もっと物や食べ物を大切にすべきだと思います。

私は、戦争のおそろしさから目をそむけずに、戦争のことを勉強すべきだと思いました。実際に戦争を体験している人も、どんどん少なくなっていてしまいます。もしも戦争のことが何も分からない人だらけになったら、あの悲劇がもう一度くり返されてしまうかもしれません。そのようなことがないように、しっかりと戦争のおそろしさを受けつがなければいけな

いと思いました。だから、次の世代を受けつぐ私達が、またそれをつぐ人達に、そのことを教えなければいけません。

世界のどこかの国では、戦争が起こっていて、きっと何人もの人々が亡くなっていることでしょう。戦争は悲しみしか生みません。そのような人がいることを、考えながら生活し、世界から戦争をなくす努力をみんなですべきだと思います。

小さな平和と大きな平和

第三小学校

5年

— 杉 夢 歩

ぼくが今まで戦争や平和について学んだり聞いたりしたことで、感じたことが二つあります。一つ目は、「小さな平和」です。ぼくは、毎日おいしいご飯を食べたり、遊んだりすることが当たり前だと思っていました。でも、昔は今のように食べたり、遊んだりすることができなかったということを知り、かわいそうだと思いました。だから、今ぼくが当たり前だと思っている生活こそが、「小さな平和」なのだと思います。

二つ目は、「大きな平和」です。「小さな平和」が積み重なって、「大きな平和」ができるのだと思います。しかし、世界に目を向けると、まだ争いをしていて、平和ではない国もあります。

では、どうしたら争いのない世界をつくれるのでしょうか？

「大きな平和」をつくり出すためには、「小さな平和」がたくさん必要です。ぼくは、今、当たり前のように学校に行き、いろいろなことを学んでいます。学校にはいろいろな性格や考えをもった人が集まっています。だから、時にはぶつかるけれども、

(自分とは考え方がちがう人もいるんだ。)

(自分には直さなくちゃいけないところがあるんだ。)

と感ずることがあります。

でも、そんなことが学べる学校に通えていない子どもたちが世界にはたくさんいると聞きました。学校へ行けないと、大人になってから、自分と考え方のちがう人をみとめるのが難しくなってしまうと思います。そうなるわけが絶えません。小さな争いが、大きな戦争へとつながります。だから、当たり前のように学校へ通い、友達と一緒に学ぶことが、とても大事だと思います。

世界中の子どもたちが、全員学校に通えるように、今の大人たちにお願いしたいです。

今すぐ、ぼくが戦争を止めることはできません。でも、自分と意見がちが

う人がいても否定しないで、ちがう意見を取り入れたり、直さなければなら
ないところは直したりできる人間に、ぼくはなりたいです。

世界中の一人一人がそう思える人間になれば、小さな争いが起きても解決
することができるようになり、大きな争いは起こらなくなると思います。

そうやって、「小さな平和」を積み重ねることができれば、戦争のない平
和な世界も、必ずつくれるとぼくは思います。

青い空

第三小学校

6年

市川 薫 子

助けたい。 遠い国の 難民たちを。

泣いている子どもたちを。

救いたい。

怖くて 悲しい 不安な気持ちを。

はかない命を。

止めたい。

爆弾が落とされて

暮らす場所さえも 失われる街を。

知りたい。

世界の現実を。

SOSを出している国を。

さげびたい。

マララさんのように

勇気をもって自分の意見を。

受け入れたい。

人種、宗教、考え方のちがいを。

歴史的背景を。

分かち合いたい。

優しく豊かな心や

人を許せる素直な気持ちを。

見守りたい。

世界中のみんなが

笑顔で暮らせる日々を。

高めたい。

平和に関する知識を。

みんな平等であることを。

想像したい。

世界中に輪になり
手をつないでいるところを。

変えていきたい。

世界が一つになれるように
黒い空を 青い空に。
世界の空が 青一色になりますように。

平和な日本

第三小学校

6年

遠藤良太

平和って、どういうことなのか？

夏休みになると、テレビではよく、太平洋戦争の特集をしている。

ぼくのおじいちゃんの一人は、昭和23年生まれ。戦争を知らない。

もう一人のおじいちゃんは、昭和17年生まれ。ほとんど記憶がないようだが、サイレンがよく鳴って、防空ごうに逃げたという話をしていた。そこで、戦争についてもっと知りたいと思い、近所の後藤さんに話を聞いてみることにした。

後藤さんは、83歳。戦争のときは11歳。今のぼくと同じ歳だ。

後藤さんもぼくと同じ第三小学校に通っていた。その当時の学校の名前は、「第三国民学校」。なんだか変な感じだ。後藤さんが六年生のときは、まだ戦時中だった。三小に防空ごうをつくるため、毎日のようにあしたか山まで、材料になる丸太を採りに行ったそう。この丸太は直径20センチくらいで、とても重くて大変だったと話してくれた。

授業もほとんどできなかったそう。戦後はアメリカ人の先生が来て、「歴史の教科書の、何ページから何ページまですみでぬって来い。」というのが宿題だったそう。

夜は、毎日のように照明弾を落とされたそう。照明弾が落ちると、真っ黒だった空が昼間のように明るくなって、夜はぐっすり眠れなかったと聞いた。昼間は、焼夷弾を落とされ、我入道では浜町が丸焼け。津島町は、半分ほどが焼けてしまった。そして、毎日のようにグラマンの飛行機が東の方に向かって飛んでいくのを見たそう。

後藤さんに、

「戦争中に何が一番いやでしたか？」

と、聞いてみた。すると、

「丸ごと戦争がいやだった。」

と、答えてくれた。

それを聞いて、ぼくも戦争はいやだと思った。ぼくと同じ歳のときに、後藤さんは、こんな毎日をくり返していた。（爆弾が落ちてこないかハラハラしながら、毎日防空ごうをつくっていたんだな。ぼくだったら、毎日あしたか山まで歩いて行けるかな？ほっとできる時間なんてあったのかな？）ぼくは考えてしまった。

そんな時代に比べたら、今の日本はすごく平和だ。毎日ごはんを食べて、ゆっくりテレビを見て、ゲームをして、少し勉強をして……。同じような毎日を普通に過ごせている。

世界では、今でも戦争をしている国々がある。今回のお話を聞いて、後藤さんたちの時代の人たちによって、今の日本の平和はあるのだと知った。だから、その人たちに感謝し、築いてもらった今の平和を、ぼくたちが大切に守っていかなければならないのだと思う。

戦争のおそろしさ

第四小学校

4年

杉山悠太

ぼくは、戦争を知りません。でも、戦争をけい験したひいおじいちゃんやおじいちゃんから、いろいろな戦争の話を聞いたことがあります。ひいおじいちゃんは、戦争の時、陸軍でインパール作戦に参加していたそうです。インパール作戦は、とても大変な作戦だったようで、一緒にいた仲間の何人かは、手りゆうだんで自ばくしていったと話してくれました。

おじいちゃんのお兄さんは、沖なわで特こう隊員だったそうです。「震洋」というベニヤ板でできた一人乗りの小さなボートにのって、夜くらやみの中、アメリカ軍の船に体当たりして死んでしまったと教えてくれました。

ぼくは、特こう隊という言葉は知っていたけれど、おじいちゃんのお兄さんがそうだったと知っておどろきました。若い命をむだにしてしまっ、とてもかわいそうだし、残されたおじいちゃんや、おじいちゃんのお母さんやお父さんも悲しかったと思います。

ぼくは、夏休みに、「平和を考える戦争史跡めぐり」に参加して、沼津市内の戦争に関係するいろいろな場所を見て回りました。

中には、おじいちゃんのお兄さんがのっていた「震洋」の格納ごうも江浦と重須にありました。他にも、いつも通っているお成橋にも戦争の傷あとが残っていることや、沼津に海軍の大きな工場があったことなどがわかりました。

ぼくは、戦争のことを知れば知るほど、戦争が、今まで思っていたより

も、ひどくて残こくなものだということがわかりました。

そして、ぼくが想ぞうがつかないくらいの戦場を、ひいおじいちゃんががんばって帰ってきてくれたから、今のぼくがいると思うし、ひいおじいちゃんの仲間やおじいちゃんのお兄さん、他にも戦争でなくなったたくさんの人の命の上に今の平和があると思うと、平和は当たり前のものではないとわかりました。

戦争は、たくさんの人を傷つけます。二度とこのようなことが起こらない世の中になってほしいと思います。

戦争はなぜおきるのか

開北小学校

6年

執行 啓介

なぜ戦争がおこるのかその理由は、自分の国の領地を広げようとするためにおこる。戦争は、人を変えてしまう。

東日本大震災の時に「津波てんでんこ」で一人でも多くの命を助ける方法を学んだ。

最近の大雨や雷では、ニュースで早めのひなん指示が出されている。これも一人でも多くの命を助けるため。

命の大切さはみんな知っているのに、戦争は人の命を人がうばってしまう、悲しいことだと思う。

第二次世界大戦の終わりのころには、ぼくたちのような小学生も竹やりを持ち人の殺し方を教えられていた。想像もしたくないくらいにいやになる。

日本の子どもや女の人も兵士として訓練されていると知ったアメリカ軍は、日本には、民間人は一人もいないとして、あちこちに、飛行機でぼくだんを落としていった。

戦争の本や映画を見るたびに、当時の人たちは、生きるのに精一杯だったことが分かる。そんな恐ろしいことが全くない現代に生まれた自分は、本当に幸せだと思う。

命をうばいあうのがあたりまえの戦争の中で、人の命を守ろうとしたドイツのシンドラや杉原ちうねのことを知った。国からの命令に逆らって、自分が殺されるかもしれない危険も恐れずに人の命を助けることを優先したことは、とても勇気がいることだと思う。

そして、とてもかっこいいと思う。どんな状況の中でも、まわりの状況に流されずに、何が一番大切かを見分けられる強さを、ぼくも身につけたいと思う。

戦争について調べる中で、人の命の大切さが見失われていくこわさを強く

感じた。ぼくは、これからも命の大切さをいつも考えながら生活していきたいと思った。

大切な命

千本小学校

6年

村田 奈 弥

私は、第二次世界大戦で、多くの国が参加して戦ったこと、広島や長崎に原子ばくだんが落とされ、多くの人々が亡くなったことなどは知っていますが、くわしく知りません。戦争について話を聞きたくても、身近に戦争を体験した人もいないので聞くこともできません。一学期に、国語の授業で、「フリードルとテレジンの小さな画家たち」を学習しました。そこで、第二次世界大戦でユダヤ人が差別され、子ども達まで強制収容所に入れられていたという事実を知りました。

ユダヤ人とは、どういう人たちなのか気になったので調べてみました。ユダヤ教の信者あるいは、ユダヤ人を親に持つ者によって構成される宗教的民族集団だそうです。ユダヤ人もドイツ人も同じ人間なのに、なぜユダヤ人だからといって差別され、殺されなければならなかったのか。この世に生まれた命、一つもむだな命はありません。こんなひどいことはないと思いました。夏休みに入るとき、司書の先生から「霧のなかの白い犬」という本をしょうかいしてもらいました。国語で学習したこととつながりがありそうなので読んでみることにしました。

この本には、第二次世界大戦の頃、ナチスは最初、高れい者や障害者を差別し、殺してしまったことが書いてありました。また、学校では、子ども達に、「ユダヤ人は害じゅうと同じだからくじよすべき存在だ。」と教育されていたことも書かれていました。子ども達は、学校の授業で先生から教えられたら、それを信じてしまうと思います。

この本の主人公、ジェシーのおばあさんは、イギリス人として暮らしていましたが、実はドイツ人でした。そしておばあさんのお父さんはじゅう医さんでした。ナチスの命令でユダヤ人のペットを殺処分しなくてはなりません。やっちはいけない、やりたくないと思っても、やらなければ自分が殺されてしまいます。そのような状況の中で、お父さんは一匹だけけれど犬を助け、それを娘にたくしたのです。その犬を返しにいったのが、子どもの頃のジェシーのおばあさんでした。ジェシーもお父さんもすごい勇気があったと思います。また、相手のことを大切に思っていたと思います。でも、その思いは相手に通じず、逆にののしられ、おばあさんはずっと苦しみながら、ドイツ人であることをかくして生きてきたのです。

戦争中は、何が正しくて何がまちがっているのかの判断もくるってしまうのでしょ。それでも何がいいことで、何がだめなことなのか、一人一人が正しい判断をすることが、平和な暮らしを守ることになると思います。差別をしないように、小さな命も大切に生きていきたいです。

マララが教えてくれたこと

片浜小学校

6年

伊海花夏

私は姉が読んでいて気になったので、「武器より一冊の本をください」を読んでみました。この本は平和と教育についての本です。主人公のマララが強くてこわい大人たちに立ち向かって自分の権利を守るお話です。

なぜ、マララはそんなに勉強がしたいのか意味が分かりません。勉強はすぐめんどくさいのになぜそんなに勉強をしたいのだろうか。でも、よく考えてみると、マララが住むパキスタンでは女の子は教育を受ける権利を認めないので、勉強がしたくてもさせてもらえないことが原因ではないかと思えます。

私は勉強をすることがあたりまえで、めんどくさくて、時々したくありません。でも、マララは勉強がしたいのに周りは認めてくれず、勉強ができません。正直勉強をしないで家にいたほうが楽しいと私は思います。けれど、勉強をしなければ、退くつだろうな、生活が大変だろうな、夢を実現できなくなるだろうなと思いました。なぜかというと、マララは学校に行けなくて、外出もあまりできず毎日が退くつでつまらないと言っていたからです。

マララが通学途中にじゅうげきにあった時が心に残りました。ただ勉強がしたいと願うマララは何も悪くないのに、とてもかわいそうだなと思いました。けれど、入院している時に、あらゆる宗教、あらゆる国籍の何百人もの子供や若者から寄せられたたくさんの手紙や絵がマララに生きる力となって「すべての人に平和と教育を。教育こそただ一つの解決策。」と全世界中に訴えられてよかったです。この本を読んでみて、勉強にたいする苦手意識が少しなくなりました。もしもこの本を読まなければ、苦手意識に、本気で向き合うことに気づかなかったはずです。

この本を読んで勉強ができることはとても幸せなんだと改めて感じました。これからは勉強ができるうれしさをもちながら授業を受けていきたいです。また、マララみたいに誰でも簡単なことではないことに挑戦したいです。マララみたいにこれからの生活で、これらのことを忘れず、一步一步、がんばっていききたいです。

自分が今、できること

金岡小学校

5年

河野友哉

ぼくはこの夏休みに、戦争史跡めぐりのツアーに参加していろいろな史跡をめぐりました。

このツアーでぼくの住んでいる沼津市にある何か所かの戦争の被害のあとなどを見て回りました。

特に印象を受けたのは、おなり橋の空しゅうあとです。今現在も残っています。かなり大きくてこんな空しゅうを受けていたのだなと思いました。

そして戦争は遠い昔の知らない場所のでき事だと思っていましたが、身近な所でそんなあとがあることを初めて知りました。

また沼津には学童そかいで東京都の小学生がひなんしてきた寺院やしせつがあったそうです。

戦争があったせいで色々なことをがまんしたり、親や兄弟とはなれて生活しなくてはならないなんて今の自分にはできないと思いました。今年に入り北朝せんとアメリカがミサイルの発しゃの実験をしていますが、ぼくは反対します。現在の日本のようにミサイルなどをうたないような平和な世界になってほしいなと思いました。

そして平和というのは、いじめや暴力などの身近なことでもなおした方が平和だと思います。自分は暴力など受けたことはないですが止めに行った時、受けた方はかわいそうだなと思いました。

戦争は、ばくげきなど直接の被害だけでなく人々の生活をまずしくしたり家族や友達をバラバラにしたりと悲しいことばかりです。そのことを今回の史跡めぐりツアーで知ることが出来ました。

今のぼくには昔の戦争や他の国のでき事について学んだり平和について考えたりすることしかできないけど、その考えを持ち続けて平和な世の中になっていけばいいなと思いました。

沼津の過去と平和な未来

大岡小学校

6年

齊藤 あゆみ

平和を取り戻すための唯一の手段を戦争という形にしてはいけないと改めて思えた夏休みでした。

私は、夏休みに明治史料館で行われた「平和を考える戦争史跡めぐりツアー」に参加しました。12カ所めぐって、強く印象に残った所が三カ所あり

ました。

一カ所目は、格納壕です。この格納壕は江浦に30カ所以上ありました。四つの危険な特攻兵器がいろいろな所に配置されていました。そして、この特攻兵器に乗る人達は、死ぬことを覚悟しているので、自分の命を犠牲にしてまで必死なのはとても勇気がいることですが、使われなかったので安心しました。

二カ所目は、海軍技研の地下工場跡です。敵の空しゅうをさけるための大きなどうくつでした。どうくつの中の整地作業に、多くの朝鮮人労働者が強制的に働かされていたそうです。日本人がそんな強制的に働かせるようなことをしていたなんて想像が付きませんでした。実際にその場所へ行ってみたら、想像以上に、広くておどろきました。

三カ所目は、そ開学園の建物です。空しゅうが続く間、三年生から六年生までの子供達がそ開していました。戦争体験者の話では、当時住んでいて、水泳訓練や地元漁師の交流などをして、のびのび生活をしていました。ここで暮らしをしていた仲間とは、同窓会などをして集まる機会があるそうです。今、戦争のない日本になって、どんなことをみんなで語り合っているのかとても気になりました。

戦争史跡をめぐる中で、戦争のあとが私たちの住んでいる沼津にもあり、戦争が日本で本当に起きていたのだということを実感することができました。当時の人達は戦っている時も、戦いに巻き込まれている時も、「早く終わってほしい」と願っていたと思います。目の前で起きていることが怖くて、おそろしくて、「もういやだ」とにげ出したくなったと思います。でもこの時代では平和を取り戻すために戦わなければならない、日本が勝利するためなら相手を倒さなければならない。とても信じられない時代だと思いました。

戦後、日本人の気持ちは大きく二つに分かれていたそうです。それは「うれしい」と「悲しい」です。私はこの気持ちは、やっと戦争が終わった、戦争に行っていた人に会うことができる、という喜びの気持ち。そして大切な人を失ってしまった悲しみで一杯になった気持ちだと思いました。この二つの気持ちを経験している人もいたと思います。

戦争は、おそろしくて誰も幸せになることができない、人間が一番してはいけないことだと思います。人の気持ちを考えず、未来のためだと戦争を起こしても、今を平和にしなければ決して明るい未来など待っていないと思います。このツアーを通して、戦争跡からたくさんを感じることができました。戦争が二度と起きないように、一人一人が行動していきたいなと思います。

戦争が起こらないために

愛鷹小学校

6年

眞野 晶

昨年、ぼくの祖父が亡くなりました。すい臓ガンで、一生けん命、病気と闘っていました。ぼくの運動会のビデオを見て、ちょっと早目に中学の制服を着た写真を見て、みんなの誕生日を祝い、そして祖母達に見守られて家で亡くなりました。

ぼくは、本当に悲しかったです。病気がわかった時、毎晩泣きました。

祖父との思い出は、沢山あります。小さい頃の写真の祖父は、いつも笑っています。

ぼくが寝返りをうった時、抱っこしている時、祖母の作ったご飯を、みんなで食べている時、一緒にペットボトルのロケットを作った時、ベランダでプールに入った時、みんなで旅行に行った時、畑でさつま芋を収穫した時、将棋を教えてくれた時、みんなみんな、祖父は笑顔でした。祖父がこんなに優しいのは、祖父自身、父親を戦争で亡くしているからだ、祖母は言っていました。父親がいなく、寂しい思いをしていたようで、孫のぼくには、そういう思いをしてほしくないという気持ちだったんだと言います。

人が一人亡くなるのが、こんなに辛いのが、戦争がおきたら、経験してきたたくさんのお幸せが、何もおこらなくなります。今だって、日本は戦争になりかけています。この状況で、きっとみんな不安だと思います。

戦争なんか、おこらない方が良い。

なぜ戦争はなくなるのでしょうか。

ぼくは、人には「感情」があるから、戦争は終らないと思います。

けんかは、ささいな事から起きるけど、それが自分にとって関係のない場所や人達だと自分には「怒り」の感情がわきません。

けれど、ぼくの友達がいじめられたり、家族が嫌な思いをするような事をされたら、それはすごく腹が立ちます。相手に対して、怒りの気持ちをぶつけ、力で何かしようとするかもしれません。

これが戦争の元のような気がします。

けんかなら人対人ですむけれど、戦争は、国対国で、戦う人達も大勢です。命をおとしていく人達が、あまりにも多いのです。

感情や愛情といった気持ちが、愛する人を守る為に戦争になるなんて、とても皮肉だと思います。感情がない世界とは、植物のように、他と関わりを持たず、自分自身で完結する世界だと思います。他人に興味関心をもつことはありません。

けれど、人間は感情があります。武器も造ります。だから戦争はなくなら

ないんじゃないかと思いました。

でもそれは、戦争をして良い理由にはなりません。

72年、終戦から長い年月がたちました。この先、日本が戦争をしないとは限りません。その引き金を引かないように、ぼく達の日本を、そして世界を守るためには、どうしたらいいのか。

きっとその答えは、未来のぼく達にかかっていると思います。

忘れてはいけないもの

内浦小学校

6年

太田萌空

日本の歴史には戦国時代と呼ばれる時代がある。数々の戦国武将が活躍した数百年前の時代、その古い戦いの世と近代に起こった戦争が、私は似ているように思う。二つの時代に起きた戦乱の確かな共通点は、その戦いが人を変えたということ。人を人でなくした戦争を人が忘れる日が来るのだろうか。

戦国期に伊賀と呼ばれた忍びの地がある。伊賀には忍びの組織があり、各国の戦国大名が暗殺や諜報にいわゆる忍者をやとっていたという話がある。敵を殺すための道具として人の命をうばうことに何の抵抗も感じなかったのか。でも、数えきれない程の合戦の中で数えきれない人が死んでいった。人の死に慣れるのは簡単だったかもしれない。人を殺すこと、人が死ぬことに慣れることは、人の心が壊れている証なのではないか。何も感じなくなってしまうのではないか。

近代の太平洋戦争などでは敵を殺すことが使命とでも言うような教育がされていたという。だから、国民全体が軍国主義に染まっていった。反対する人がいても、みんなで押しつぶした。そんな環境で過ごしたら、敵を殺すことが正しいと思い込んでしまう。人を殺すことが間違いだと思わなければ、人を殺すことなど簡単なのだ。そうして人が人でなくなっていく。私の曾祖父は戦争に行き帰って来たという。曾祖父も敵を憎んだのか。敵を殺すため自分が死んでも良いと思ったのか。私には分からない。

現在にも、人を殺す人がいる。その中に殺したくもないのに戦争に巻き込まれたからと兵として敵を殺す人がいる。そして、それは日本に戦争が起これば私もなり得る存在なのだ。でも、私は人を殺したくないし、人でなくなるつもりもない。私から人であることを抜けば、私は何者にもなれない。そう思うから。

人が他の動物より一つ優れているとしたら何かを覚えて考え、生み出す力があるところだと思う。その力があるからこそ私は生きていると思うし、積

み重なって現在があると思う。だから、人の心を壊してその力を人間が失えば、人間が他の動物より優位に立てることなどあり得ない。でも、戦争は恐ろしいことで人を殺すのはいけないと、戦国時代、下手をすればそれ以前にもう人は知っていたはずだろう。なのに、忘れた。250年余りの平和の中で悲劇を忘れた。だから、今度こそ、人は人の心を忘れてはならない。戦争の傷跡を忘れてはならない。現在、未来に人として生きたいのならば。

笑顔を守るために

原小学校

6年

高橋希歩

7月末日、私達家族は静岡市にある静岡平和資料センターに行きました。8月の終戦記念日をむかえる前に、戦争について少しでも知ろうと思ったからです。この資料館は静岡の中心部のはんか街のど真ん中に位置していて、戦争とはかけはなれた場所にありました。

中に入るとすぐに、中国との戦争やアメリカ、イギリスとの開戦の様子が展示されていました。難しい言葉や漢字が多くて、正直よく分かりませんでした。ガラスのショーケースの中には、こげ茶色の軍ぼうやほう公ぶくろなど実際に使用されていたと思われるものがおさめられていました。その中で特に目をひいたのは、小さい子供のかわいい着物でした。

でもよく見ると戦かんや軍馬の絵が入っていて、戦争が生活の一部になっていることが分かりました。さらにおくに進むと、わらで作ったほうきのようなものがありました。これは火たたきといい、火事になったときに水につけて火を消していたようです。どうやって火事になるのかなと、疑問に思っていると、センターの男性が、

「戦争の映像があるので観てみますか？」

と声をかけてきました。私は軽い気持ちで観ることにしました。

いきなり始まる飛行機の映像。飛行機から落とされた焼い弾。赤くそまる街並み。だんだんと心が苦しくなってきました。焼い弾の作り方と使い方を見たとき、あの火たたきを作った理由がようやく分かりました。焼い弾が落とされるたび、

(もうやめて！)

と思いました。米軍機は容赦なく市民をしゅうげきしました。その当時の人口密度を計算して、一番効率よく破かいできる場所に焼い弾を落としていたのです。そのリストの中に、私達が住む沼津の街もありました。沼津は1月から8月にかけて8回もの空しゅうを受け市街地面積の約90%が焼けました。これは全国でも上位の焼失率でした。ますます私の心は苦しくなり

ました。

映像が終わるとセンターの男性に手招きされ、別室で戦争体験のVTRを観ました。

体験者の話の中で私が最もしょうげき的だったのは、防空ごうに入ろうとしたお母さんと赤ちゃんがそのままのかたちで黒こげになって亡くなっていたという話でした。あと数秒早く入っていたら助かったかもしれない。今も生きているかもしれない。まさに生と死のさかい目のようでした。

「ここに実物の焼い弾があるよ、さわってみる？」

と言われました。おそろおそろ手に取ると冷たい金属のかたまりが、私の心にも重たくのしかかるようでした。

このセンターを出ると街中に笑顔があふれていました。この笑顔を絶やさないためにもどんな理由であれ戦争は絶対に起こしてはいけないことなのだと強く思いました。

七十年前の日本

原小学校

6年

門部安梨

「ウー。ウー。空しゅうけい報。空しゅうけい報。」

その放送がなると、人々は山や川にひ難をする。家にいた人は最低限の物だけを持ち、家族と逃げる。学校にいた人は先生たちに、

「ほんざの山に行け。」

と言われ、一年生から六年生までの子どもが防災頭きんをかぶって山に逃げた。これは、私のそう祖母から聞いた話だ。私と同じ子どものころの体験をたくさん話してくれた。町の人々全員が来るとひ難場所がなくなってしまうから、小さなくぼみに十家族ぐらいが入って協力して住んだ。その山から西を見てみると、B29のぼくだんで真っ赤になった清水町が見えた。そう祖母たちがいた所は、田舎だったのでぼくだんは幸い来なかった。大変なこともあったが楽しい事もたくさんあったそう。

夏といえば海だ。港の方でみんな楽しく泳いで、たまに伊豆から人を乗せて、船が帰ってくる。だが、船から人がたくさん降りて来るため、それをねらってB29はたくさん人をうっていった。泳いでいた子たちは急いで上がってきて、船に乗っていた人々は、さけびながら出て来たそう。こういうときは、何でもいいからとにかく頭を守った。ふつうに生活していて、近くで空しゅうがあつたらその場にしゃがむ。そうすると、敵に見つかりにくいのだそう。敵にあう前に

「頭を守れ。何でもいいから頭を守れ！」

といい、なべなどをかぶって、なんとか空しゅうをやりすごす。空しゅう中大変なのは、食料が無い事なのだそうだ。敵が来るため、食料は買えず、自分たちの畑で小麦を作って、毎晩機械でうどんを作って食べていました。二つの家で一つの機械を使っていたので、機械が使えないときは、水とんを作る。水とんは、うどんのつゆの中に小麦粉をちぎった物を入れた食べ物だ。そういうメニューしか食べられないのだ。戦争に行く健康な男の人たち、18～20才までの男の人たちは強制的に戦場に行かされた。戦争に行った多くの人が死んでしまった。

戦争の間、日本人が大切にしていた言葉は、『ほしがりません。勝つまでは』で、戦争が終わるまでだれもあれがほしいこれがほしいとは言えなかった。今ではとても考えられない生活だ。足りない物、無い物は自分たちで作ったりみんなで協力しあってすごしたりしていたそうだ。

こんなにつらく、苦しい生活をさせられていて、おまけに命の危険もとなり合わせの毎日だったなんて、本当に信じられない。日本は今、戦争のないくらしができています。当たり前のように思っている毎日が、70年前の日本ではできていなかったことがとてもよく分かった。これから先も、平和な世の中が続いていってほしいと、心から感じた。

原爆ドームに行つて

香貫小学校

6年

市川 ゆらり

私は、夏に初めて広島県に行き、原爆ドームを見ました。着いた時、広島
の街はとてもきれいだなと思いました。高いビルや大きなショッピングモ
ールがたくさんありました。

ドームに行くと、お兄さんが原爆について説明してくれました。この建物
がいつ、どんなことで、あのすがたになったのか教えてもらいました。話を
聞いて、原爆があったのが、こんなきれいな街になったとは、信じられな
かったです。きれいな街の下に原爆のあとがあるかもしれないと聞いて、今立
っている所も被害があったのだと思いました。平和公園のベンチで鳥にえさ
をあげているおじいさんがいました。そのおじいさんはひまだから、あげ
ている訳ではありませんでした。おじいさんが10才のころ、そかいしていた
から、原爆にはあいませんでした。でも、お母さんやお父さんは、原爆で亡
くなってしまったそうです。親のいないおじいさんは、食べる物が無いの
で、生きるために鳥をつかまえて、羽をむしって、食べたそうです。だか
ら、今は、その時に助けてもらったお礼に、おなかいっぱいになるように鳥
にえさをあげているそうです。もし、自分だったら、一人で生きていくこと

もできません。鳥をつかまえて食べることもできません。そう考えると、10才なのに一人で生きてきて、食べ物に困ったことのない私には、とても想像も考えることもできないくらい大変なことだったと思います。

平和記念資料館で、原爆でどんな被害があったのか見ました。一番印象に残ったのは、原爆を経験した人がかいた絵です。それを見て、小さいころに読んだ、絵本の地ごくの絵のようでした。そんなことが、現実にあったとは、とても思えないような絵ばかりでした。改めて原爆は怖いものだと思います。

私が毎日、平和に過せるのは、とても幸せなことだと思います。この平和があるのは、原爆や戦争でぎせいになった人がたくさんいたことを忘れてはいけないと思いました。

広島に行ってみて

西浦小学校

5年

葛野 翔

私は、夏に初めて広島県に行き、原爆ドームを見ました。着いた時、広島
の街はとてもきれいだなと思いました。高いビルや大きなショッピングモー
ルがたくさんありました。

ドームに行くと、お兄さんが原爆について説明してくれました。この建物がいつ、どんなことで、あのすがたになったのか教えてもらいました。話を聞いて、原爆があったのが、こんなきれいな街になったとは、信じられなかったです。きれいな街の下に原爆のあとがあるかもしれないと聞いて、今立っている所も被害があったのだと思いました。平和公園のベンチで鳥にえさをあげているおじいさんがいました。そのおじいさんはひまだから、あげている訳ではありませんでした。おじいさんが10才のころ、そかいしていたから、原爆にはあいませんでした。でも、お母さんやお父さんは、原爆で亡くなってしまったそうです。親のいないおじいさんは、食べる物がなくて、生きるために鳥をつかまえて、羽をむしって、食べたそうです。だから、今は、その時に助けてもらったお礼に、おなかいっぱいになるように鳥にえさをあげているそうです。もし、自分だったら、一人で生きていくこともできません。鳥をつかまえて食べることもできません。そう考えると、10才なのに一人で生きてきて、食べ物に困ったことのない私には、とても想像も考えることもできないくらい大変なことだったと思います。

平和記念資料館で、原爆でどんな被害があったのか見ました。一番印象に残ったのは、原爆を経験した人がかいた絵です。それを見て、小さいころに読んだ、絵本の地ごくの絵のようでした。そんなことが、現実にあったと

は、とても思えないような絵ばかりでした。改めて原爆は怖いものだと思います。

私が毎日、平和に過せるのは、とても幸せなことだと思います。この平和があるのは、原爆や戦争でぎせいになった人がたくさんいたことを忘れてはいけないと思いました。

過去と未来

西浦小学校

6年

遠藤彩夏

たった一人の人間が何万という人間を動かし、何万という人間を殺すことができる。

この世には、人間以上に恐ろしい生き物は存在しない。

70年以上前におこった、第二次世界大戦。その中で行われたユダヤ人の大量ぎやく殺。

戦争なんて、大人たちで話し合えばすぐに解決できた問題だったのではと私は思ってしまう。人々の願いを無視して、恨み、憎しみはどんどんどんどんふくれあがり、ついには子供達にまでその力はおよんだ。子供達は親から、家から、町をうばわれ、収容所に集められた。そこで子供達は怒鳴られ、暴力をふるわれながら働かされた。それなのにごほうびとしてもらえるのは痛みとさらなる恐怖、そして、アウシュビッツへの片道切符だけだ。収容所の子供達が何を思い、過ごしていたかは私には想像もつかない。けれど、私だったら恐くて、心をからしながら過ごしていると思う。昨日の夜、おしゃべりをしていて「また明日続きを話そうね。」と笑っていた子が、今日の朝にはこの世から消えていた。そんなことが収容所で日常的におこっていたのだ。

「助けて」という心の叫びはだれにもとどかなかったのだ。

私は、恐くてたまらない。

さっきまで元気に笑っていた友達が

明日遊ぼうと約束していた両親が

次の瞬間、突然いなくなってしまうなんて。

命をにぎりつぶしたのは？人間だ。

今の日本の世の中は、生きていれば必ずだれかが手をさしのべてくれる。必ず、助けてくれる。だけど、助けてくれる人がだれもいなかったら？家がなくて、おなかがすいてたおれそうなのに目の前にはただ、道が永遠に続いているだけだったら？私は想像しただけで、暗いどうしようもない気持ちになった。恐くて恐くて、たまらない。それを現実にしたのは？私たち人間

だ。

昔があるから今がある。過去があるから未来がある。人間は何万という命をうばう力がある。だけど人間は何万という命を救う力がある。戦ぼつ者の遺体の上にさらに戦ぼつ者の遺体を積み重ねては無意味だ。犠牲となった人達の恐怖を想像し、二度と同じ恐怖を人々が感じないように、と願う人が一人でも増えれば、うばわれた命はけっしてむだではなかったのだと思う。

大勢の犠牲を無意味にしないように、二度と同じ恐怖を感じることはないように、私は考え、想像し続けたい。人々の苦しみや、人間の恐ろしさを。

この世には、人間以上に恐ろしい生き物は存在しない。

だけど、人間以上に一人一人が明日を明るくてらせるほどの力をもった生き物も存在しないと思う。

原爆のおそろしさ

西浦小学校

6年

杉山 綸那

去年の夏休み、私は自由研究で「原爆」について調べました。私は、原爆について調べる前から戦争の事は気になっていて、色々な本を読んでいました。

テレビで、沖縄戦争の事を放送していました。7歳の女子が、家族とわかれ、一人で戦争を生き抜くという話。この話を聞いて、私はすごくおどろきました。私より小さいのに、一人で生き抜くなんて。私には無理だと思いました。たくさんの犠牲者の遺体がたおれている道。うじ虫のわいた川。きっと私は、一人でなんてたえられません。

毎年8月6日は、原爆の記念式典のニュースがやっています。ですが、一昨年までは気に留めず、そんな事があるという事すら知りませんでした。ですが、いつもと違い、ニュースで話している事が、少し気になっていました。去年の式典では、オバマ前大統領が来ていたので、すごく注目されていました。

この時、（どうしてオバマ前大統領は来ているんだろう）、（原爆って何なんだろう）と思いました。それで、自由研究で調べる事にしました。

1945年8月6日、アメリカは、広島に原爆を落としました。約14万人が亡くなったとされています。これだけの人数を一つの爆弾で犠牲にできると知って、アメリカや、他の国が怖くなりました。今、アメリカが本気を出して、新たな核兵器を作れば、もっと被害の大きい核兵器が作れるわけです。こう思うと、戦争がまたおきないか、とても心配です。

他にも日本での戦争だけでなく、他国での戦争も知っています。今国語で

勉強をしている、ドイツのユダヤ人迫害について。この話を読んで、最初に思ったのは、戦争に関係のないユダヤ人が、どうしてこんなことされなければならないんだ、と思いました。しかもその中に、子どもや女性もいます。

今では、ふつうに行ける、学校や、公園、遊園地も行くことができないなんて、きっと、ユダヤ人の子たちは、すごく悲しかったでしょう。私は、毎日のように、学校に行くことができ、すごくうれしいと思いました。

仕事をしないと殺される。話もしてはいけない。今できている事が何もできない。すごくつらいだろうなと思いました。実際に、体験したわけではないのでユダヤ人の気持ちは、まったく分かりませんが、こんな生活、私は、絶対にしたくありません。

核兵器は、今たくさんありますし、今でも、戦争をしている国はたくさんあります。私は、実際に、戦争を体験していないので、実際に体験をした人の気持ちも、戦争のひさんさも、分かりません。ですが、また戦争は起こってほしくないです。私一人では、戦争を防ぐことはできませんが、知っている限りのこわさ、悲しさ、ひさんさを、忘れずにいること、そしてそれを色々な人に伝えていくことが第一歩だと思いました。

戦争のこわさを知った夏

門池小学校

5年

吉澤健太

三年生の社会の授業で昔のくらしを勉強しました。その時に戦争のことを沼津のおじいちゃんに聞いたら、

「まだ小さかったから記おくがあまりないけれど、この近くにも二つ防空ごうがあったんだよ。」

と教えてくれました。川崎のおじいちゃんにも聞いたら、

「さつまいものつるをよく食べて、家の庭に防空ごうを作ってその中に食料を入れて置いてね、東京大空しゅうの時には、東京方面を見ると炎が真っ赤に見えてとてもこわかったんだよ。」

と教えてくれました。

ぼくのたん生日は、終戦記念日なので戦争の事をちゃんと知りたいと思い、今年の夏休みに広島に行って来ました。

まず最初に原ばくドームに行き、今でも記念物として残しているのは、ひばく当時の姿を未来にも伝えるためだと知りました。国立広島原ばく死ぼつ者追とう平和祈念館では、原ばくで多くの亡くなった人達の体験談を映像で見ました。ぼくには、想像もできないくらいの苦しみや悲しみがあったのだと思いました。広島平和記念資料館では、広島市の上空で世界で一番最初に

原爆が落とされ、強い熱線、ばく風、放射線が一度に広島を襲い、一しゅんにしてたくさんの人々の命がうばわれたこと、その後もとても苦しんでいる人達がたくさんいるということを知りました。

ぼくがこの旅行で一番印象に残っているのは、やけどでのどがかわき、放射能が入った黒い雨でも飲んだり、皮ふが落ちてしまっているけれど、子供のために必死に生きようとしたお母さんの姿で、本当になみだが出ました。もう二度とこのようなことにならないように、広島に行ったぼくがみんなに伝えたいことは、平和とは、ただ戦争をしないだけでなく、核を持たず、安全なかんきょうで生活ができ、一人ひとりが思いやり、ゆずり合いの心をもつことだということです。

お国のために

沢田小学校

6年

石原 ちなつ

私は、この夏に「平和」と深く関係のある「戦争」について調べました。

その中でも、注目したのが「特別攻撃隊」です。アメリカ軍の戦艦に自分の身を捨てて、飛行機ごと突っ込んでいく動画を見ました。実際に、特別攻撃隊に入っていて出撃する予定であったが体調をくずし、のがれられた人のインタビューのシーンも見ました。

それによると、本当は「神風＝しんぷう」と呼ばれていたことや、死にたくて、自分の思いで特攻隊に入ったなど多くの事を語っていました。

そんなに語れるのは「お国のために」戦った人だからだと思いました。

「お国のため」って何だろうと考えました。

私は、なぜそんな死にたかったのかが分かりませんでした。本当に、その戦争のまっただ中にいなければ分からないのかなと思いました。今の日本は、平和で治安の良い国です。でも、72年前にそんなことがあったなんて想像もできません。戦争を体験している人達もへってきて、平和が当たり前の日常になってきて、戦争を伝えていくことも困難になってきています。

私は以前、曾祖母から戦争の話を聞いた事があります。曾祖母は、当時、家が山の中だったため、何も攻撃されなかったが、いつも戦闘機が空を飛びかっていたそうです。曾祖父は、中国に戦争にでていたそうです。

最近も、北朝鮮とアメリカの関係が悪くなり、第三次世界大戦が起こるかもしれないと言われていますが、戦争以外で解決できる方法がないのかと考えます。戦争になれば、日本にもえいきょうが出て、生活が不自由になってしまい、たくさんの人がぎせいになってしまうのです。

世界の人々が平和にくらすという目標は、夢のまた夢ぐらい現実味がない

し、世界が平和であるということの意味やどのような状態が平和であるかなどと説明できる人はほとんどいないのではないのでしょうか。

しかし、目の前の小さな平和を考え、周りの人と協力したり、政治のよい進め方・貿易の平等などを考えたり、この世に暮らす全ての人が、平和に向かって実行していけば、平和のてんびんがぴったりつり合うのではないのでしょうか。

もしかしたら、ぴったりつり合わせるのは、不可能かも知れないと言うのが答えなのかも知れないが、全ては「我が国のために…」と言うことから「平和のために…」という世の中をみんなで作り上げていくことが大切だと思います。

おばあちゃんとせんそう

大岡南小学校

4年

村松心優

おばあちゃんとは、私のひいおばあちゃんです。

今年で、89才になります。

おばあちゃんは、せんそうたいけんしゃです。おばあちゃんの体験したせんそうは、第二次世界大せんです。おばあちゃんは、14才の時にせんそうを体験しました。

おばあちゃんは、名古屋にすんでいました。第二次世界大せんが始まり、アメリカが、日本にせめてきて、都会だった名古屋は、ねらわれてきけんだということでした。

そこで、しんせきのおじさんが、沼津で、「ふじせいさく所」という、大きな工場をけいえいしていたので、家族全員で、沼津へそかいしてきました。

ふじせいさく所は、ぐんじゅ工場です。ぐんじゅ工場というのは、ぶき、だんやくをはじめとする、ぐんじゅ品を開発、しゅうり、ちょぞう、しきゅうするためのしせつです。

つまり、せんそうで使う道具や、てっぽう玉などを作ったり、直したり、ためておく、そして、わたすためのしせつです。

その中でも、せんそうで使う、ぶきを作るためのきかいを作っていました。

おばあちゃんは、ふじせい作所の事む室と、医む室ではたらいていました。

かんごしさんが一人しかいなかったなので、お手伝いをしていたそうです。毎日、けがや、やけどをする人が、とてもたくさんいて、たいへんだった

と、言っていました。

沼津大空しゅうは、昭和20年7月17日午前1時ごろあったそうです。

沼津大空しゅうがあった日、おばあちゃんは、工場の安全なたてもものの中にいたそうです。

工場のうらに田んぼがあって、女の人が赤ちゃんをおんぶして、ひなんしていて、そこにぼくだんが、落ちたそうです。女の人と赤ちゃんが、黒こげになったしゅん間は、今でもわすれられないと言っていました。

夜、空しゅうけいほうがなり、ひなんしている時に、箱根の山のむこう、たぶん、あたみの方が、まっ赤にもえているのが、見えたそうです。私は、せんそうという物を、テレビのニュースや、本でしか、知りません。でも、それは、自分とは、まったくかんけいのない世界のお話だと思っていました。実さいに、今、せんそうで、くるしい人がいても、まったく、他の人のことで、とくに考えたりもしませんでした。ただ、「たいへんだなー。」とか、「かわいそうだなー。」と思うだけです。

でも、実さいに、私の大すきなおばあちゃんが思い出しながら、たまになみだをうかべて、せんそうの話をしてくれて、とても、心にひびきました。

日本はせんそうをしない、平和まぎ国です。

それは、おばあちゃんのような、せんそうで、悲しい思いや、つらい思いをした人たちが、もう二度と、せんそうをしてはいけないという、強い思いだと思います。そのおかげで、私は、せんそうのない日本で、幸せにいらしていているのだと思います。

せんそうを知らなくて、せんそうのことをわすれている人もたくさんいると思いますが、私は、おばあちゃんの話と思い、そして、せんそうを、わすれません。
